

三豕河を渉る

聖光園 細野診療所広島診療所
山崎 正寿

つい最近、文化勲章受賞者で漢字研究の泰斗、白川静先生が亡くなられた。先生の御著書、字統、字訓、字通の三部作は、梅原猛先生の勧めで、小生も手に入れ勉強させていただいている。小生などは、昔、父から字を知らないと言われた口であり、偉そうなことは言えないが、漢字の勉強は大変面白い。

今年は十二支の亥(み、イノシシ)の年である。イノシシは今日猪(猪)という文字になっているが、猪(猪)は本来ブタの意味で、イノシシは野猪になる。ブタとイノシシは同じ種に属している。猪の偏の豕(シ、いのこへん)はブタやブタの類の総称で、それこそ白川先生の字統によれば、豕はブタの形。或いはブタが尾を上げた形という説もある。ちなみに今日ではブタは豚である。

この豕と亥の文字の読み誤りを例えた言葉に、「三豕(さんし)河を渉る」という呂氏春秋の寓話がある。呂氏は商人から秦の宰相まで上りつめた呂不韋で、後に秦の始皇帝より自殺に追い込まれた人でもある。その呂氏が宰相であった時に、賓客から聞いた様々な話をまとめ呂氏春秋として世に出したものである。

昔、孔子の門人の子夏(文字を善くした)が晋の国に赴こうとして、衛の国を通り過ぎたときに、衛の史官が、「晋の軍隊が三豕に河を渉った」と言った。すると子夏は「それは間違いでしょう。己と三は字の形が似ており、豕と亥も似ているので、三豕は己亥でしょう」と言った。果たして子夏が晋の国に着いて尋ねると、「晋の軍隊が己亥(つちのとみ)の日に河を渉った」という。己亥を三豕(三匹のぶた)と読み違えて言ったというのである。

同じ呂氏春秋にあるもう一つの寓話は、宋の国の丁氏は自分の家に井戸が無いので、外で洗い物や水汲みをせねばならず、そのため召使の一人は常時外で働いていた。丁氏の家が井戸を掘るに及んで、丁氏は人に「私は井戸を掘って人(召使)ひとりを手にいれましたよ」と語った。これを聞き伝えた者がいて、こう言った「丁氏は井戸を掘って土の中から人一人を得たんだと」。宋の国の人々がこれを聞き伝えて、宋の君主の耳に入れた。宋の君主は珍しい話だとして、人を遣わして丁氏にたずねると、丁氏は「家に一人の召使を得たということです。井戸の中から人ひとりを得たということではありません」答えた。

つまり耳にする言葉は間違っていたり、正しかったりするので、その是非を弁別する根拠は、はっきりさせておく必要があるという。これは今日でも通用する話であって、〇〇詐欺などにかかった人は耳が痛いと思われる。

猪の話から思わぬ方向に向かってしまったが、漢方では猪(ブタ)は猪胆汁や猪膚として傷寒論に出てくる。猪胆汁の気味は苦寒で、熱による燥を潤し、気を通

ずる作用があり、大猪胆汁は強い下剤を内服させることができない場合に、便秘の浣腸薬として用いられる。少陰病で下利が止まず、手足の厥冷、脈が触れなくなったような場合には、白通湯に猪胆汁を加え、陽気を起し脈を生ずるのに用いられる。ただ猪胆汁は生で用いることは難しく、乾燥したものを他薬に混じて溶かして用いるようである。また猪膚湯は少陰病の咽痛下利を治す。金匱要略でも猪肉、猪肝、猪骨、猪脂(膏)などが用いられ、猪膏髮煎は黄疸に使われる。また猪骨や猪膏は解毒剤としても使われている。ただ古代の猪は家畜として人に養われ、既に多種類猪が存在していたにせよ、今日の品種改良された豚とはずいぶん違ったものではないかと想像される。猪の代わりに野猪(いのしし)の胆汁を用いるのは誤りであると。